



身体が語る人間の発達 : 「なんば」という行動を通して (第3部 分科会) (第9回発達科学シンポジウム 人間発達の可能性 : ヒト・人間・社会)

近藤, 徳彦
齋藤, 健司

(Citation)

神戸大学発達科学部研究紀要, 12(3):53-55

(Issue Date)

2005

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81000625>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81000625>



分科会

身体が語る人間の発達－「なんば」という行動を通して－

The Body Tells Human Development : From a Human Behavior as “Namba”

近藤 徳彦

神戸大学 発達科学部 人間行動・表現学科 身体行動論講座

齋藤 健司

神戸大学 発達科学部 人間行動・表現学科 身体行動論講座

講演タイトル・講演者

「“なんば” は右足を前に出すときに左腰が前に出る」

小田 伸午氏（京都大学大学院人間・環境学研究科）

「“なんば” 歩きに関する議論の再検討－歴史的視点から」

秋元 忍氏（神戸大学発達科学部人間行動・表現学科身体行動論講座）

1. 趣 旨

人間の歩き方・走り方はどのように発達してきたのだろうか。例えば、歩行の発達を人類種から見ると、四足歩行から類人猿のように前足を自由に動かせるような四足歩行と二足歩行の中間へ、そして人間のような完全な（？）二足歩行への変化として一般にとらえられている。しかし、我々が現在獲得している二足歩行の行動様式はこのような発達段階のみで説明していいのだろうか。歩く・走るといったヒトの基本的な行動は、人類の発達段階でも変化しているが、それ以外の要因にも影響を受けている。特に文化のおよび社会的な変化によってこの基本的な行動は大きく影響されていることが考えられる。日本の場合を考えると、社会情勢や生活様式の変化は欧米とは異なった変遷をたどっていることから、これらの行動への影響も同様に欧米とは異なっている可能性がある。日本独特の歩行様式として「なんば」と呼ばれる行動がある。この歩行は現在の人間が無意識に行っている脚と腕を対照的に動かし、体を捻る歩行とは異なる動きであり、腕と脚が同じ方向に推移する動きと知られているようである。これまで「なんば」という行動は人文・社会学的や自然科学的な研究から十分に検討されている訳ではなく、抽象的な議論が多いようである。

そこで、本分科会では、2名の講演者の方に、この「なんば」という行動の特性を、機能的な側面と歴史的な側面から解体していただき、それらを手がかりに、歩く・走るといった基本的な人間の行動がどのように変遷・発達してきたのか議論し、人にとっての発達という意味を再検討するとともに、人間発達の新しい研究を模索した。

2. 講演の概要

「なんば」という行動特性を機能的側面（自然科学）と歴史的側面（人文・社会）の両面からとらえるため、前者は小田伸午先生（京都大学大学院人間・環境学研究科）に、後者は秋元 忍先生（神戸大学発達科学部）にお願いした。

「“なんば” は右足を前に出すときに左腰が前に出る」（小田伸午）

同じ側の手と足が同時に出る歩きかた、という定義をするのがこれまでの「なんば」の解釈であった。これは江戸時代まで存在していた飛脚などの絵から推測したものであり、海外書物では“the

right arm and leg swing forward at the same time、 and then the left arm and leg swing forward” というような表現をしていた。しかし、武道などでの動きで「なんば」と言われているものを自然科学的観点から分析すると、同じ側の手足が同時に出るのではなく、体幹を捻らないような動きであることが明らかとなった。これらの研究から得られたことを要約すると以下のようになる。

- 1) 通常歩行では、着地期中盤から後半にかけて着地足側の腰部を進行方向に回転させる力が減少するために、腰部の回転角度変動が大きくなる。
- 2) なんば歩行では、着地期中盤から後半にかけて着地足側の腰部を進行方向に回転させる力がかかっているため、腰部の回転角度変動が比較的小さく抑えられ、その結果なんば歩行では、体幹の捻れ角度が小さくなる。
- 3) この動きを習得している陸上選手では腰のねじれが少なく、また、地面をキックするときに足首が伸びきらない。
- 4) 右足を前に出すときに左腰が前に出るような走りをした場合と普通の体幹を捻る走りをした場合では、疾走中の酸素摂取量は前者の方が少なく、効率がいい。

このようなことから、なんば歩行の動作感覚的イメージは、右足を踏み出すとき、右腰が前に出て左腰が下がるような動きではなく、右腰が前に出ながらも、むしろ着地脚側の左腰が積極的に前に出るような動きであると思われる。走歩行運動の一つの要諦は、いかにして後方にスイングした脚がスムーズに素早く前方スイングに切り返すか、というターンオーバーである。したがって、なんば走歩行では、着地期において脚が後方にスイングしているときに、すでに腰が前向きの加速度を持つことが、鞭のような素早い脚のスイング方向の切り返しを生み出すことに貢献しているものと思われる。あかちゃんの歩行をみると体幹を捻るような動きではなく、右足を前に出すときに左腰が前に出るような歩き方をしている。人間は本来このような歩き方を持っているが、文化的影響などからその動きを忘れたのかも知れない。

「なんば」歩きに関する議論の再検討：歴史的視点から」(秋元 忍)

1) 議論の前提：「なんば」歩きとは何であったか？

近代以前の日本人がみな、いわゆる「なんば」と言われる歩き方をしていたという確証はない。「なんば」歩きをする身体は、歴史的な手続きを経て再構成され、認識された事実として存在していない。その身体は仮説の上塗りによる虚構の中に存在しているのみである。「なんば」歩きを自明のものとし、展開される議論は空論である。「なんば」歩きに関しては、以下の仕事が歴史家に要請されている。a)現存史料の再検討と新たな史料の発見。b)史料に基づく「なんば」歩きについての歴史像の提示。

2) 「なんば」歩きはいかに注目されるようになったのか？

「なんば」歩きにしばしば付加される「日本古来の」「合理的な」技法という説明には、「なんば」歩きへの注目の背景を読み取ることができる。

a)「日本古来の」身体技法としての「なんば」歩き

「なんば」歩きを伝統的な、優れた身体技法とする主張には、近代的、西洋的、人工的な身体への批判と、前近代的、非西洋的、そして自然な身体への郷愁が織り込まれている。しかし、「なんば」歩きとみなされている技法は、日本という国の境界の内側に生活してきた人間に固有のものであったわけではない。自然な身体の動きとしての「なんば」歩きの擁護も、新たな規格化を生む契機を孕んでいる。

b)「合理的な」身体技法としての「なんば」歩き

近代スポーツへの応用という観点から、「なんば」の合理性が主張されている。その合理性は自然科学によって裏書きされる。しかし、この「なんば」歩きは、本質的に、過去に存在したとされる「なんば」歩きとは意味が異なる。過去に、「なんば」歩きなるものが存在していたとしても、そのように歩く人々が、その歩き方に合理性を見ていたわけではない。今日の「合理的な」技法としての「なんば」歩きは新たな発明品である。この発明品は、近代スポーツに従順な身体を、従来のトレーニングと同様に再生産する。そこでは、過去の「なんば」とは何であったのかは重要な意味を持たない。よって、近代スポーツを超克する可能性を持つ、新たな身体行動の可能性が提示されることはない。

3)「なんば」歩きから人間の発達を考えるために

近代スポーツにおける卓越は人間の可能性を示唆する。しかし、人間の発達の可能性は、近代スポーツのみに見出されるものではない。偏狭な国家主義や、近代スポーツへの妄信から距離を置いて、過去の身体行動のあり様を見つめ直す必要があるのではないか。将来の展望は、過去の批判的な検討によって拓かれるからである。

3. 議論と課題

今回の分科会では、「なんば」という一つの現象を多方面からとらえようとし、その意味で様々な議論が行われた。主な議論の内容は以下のようであった。

- 1)「なんば」は自然な動きであるが、それをどのようにとらえ、また、スポーツや教育の場面に結びつけるのか。「なんば」の動きを説明するにはどのようにすればいいのか。この質問に関して、自然な動きは意識しないことが重要であるが、自分のこれまでの概念をかえる必要があること、また、「なんば」の動きを言葉で伝えるときには、できるかぎり感覚的な言葉に置き換えることが重要であるなどの指摘があった。
- 2)江戸時代には走り方の呼び名として、かけるやはせるなどの言葉があったが、この言葉と同様な走りがあったのではと考えられるが。この質問には刀などの物との関連があることが示された。また、衣服や靴（道具）と歩き方との関連についても議論され、着物と「なんば」との関係があるのではと説明があった。一方では、「なんば」という行動様式が日本独自のものでないとする、着物との関連は慎重にしないといけないことも指摘された。
- 3)言葉の定義を明確にするという意味で、歴史家の重要性が指摘され、また、今日の「なんば」の意味はメディアの影響が大きいことも示された。このようなことから、従来、言われていた同じ側の手と足が同時に出る歩きかたという「なんば」解釈は再検討して、何が真実なのかを明確にしていく必要がある。

これら以外にも活発な議論が行われ、「なんば」の理解を深めた。

今回、歩く・走るといった基本的な行動を「なんば」という様式からとらえなおし、人間発達とはどのようなものを模索することを主眼とした。講演や議論にあるように、人間本来備わっているものが、人間を取り巻く環境により影響を受け、変化していく過程が「なんば」から見て取れた。つまり、人間の発達には個体と環境の関係が重要であり、これはこの学部がめざす方向と大きく関係する。また、多方面から議論していく場合に“ことば”の定義が重要であることを痛感した。今回の分科会は自然・人文・社会分野の多方面からみた人間の発達をとらえるいい機会であり、今後の研究の方向性が見えた会でもあった。